

英語科の「言語活動」は他教科と別物ですか？

今井裕之

(関西大学)

1. 学習指導要領の目指す「言語活動」

「他教科では言語活動を日本語で行うのだから、英語科の言語活動とは違って当たり前」というのも、もっともな見解である。だからといって「十分な英語知識がなければ言語活動はできない」、「英語力をつけるのが目的で、言語活動はそのための手段だ」などと言語活動を軽視しないのが英語教師のプロ意識だと思う。

「言語は知的活動（論理や思考）の基盤であるとともに、コミュニケーションや感性・情緒の基盤でもあり、豊かな心を育む上でも、言語に関する能力を高めていくことが重要である」（中教審、平成20年答申）ことから、「生きる力」育成のために、小中高の全教科で「言語活動」の一層の充実を図ることが現在の学習指導要領にはうたわれている。

文科省の『言語活動の充実に関する指導事例集【中学校版】』に紹介されている言語活動事例には、国語科ほか全教科にわたって、記録、要約、説明、論述などの、思考や判断を論理的に表現する活動が多く挙げられている。このように、論理的思考や判断を話すこと、書くことで表現する言語活動を典型例に掲げられてしまうと、“I think ~ because ...”のような言い方を中学2年で学ぶ入門期の学習者にとっては、ハードルがとても高く感じられるだろう。また教師も「英語科は『基礎的・基本的な知識・技能の習得』にその目標を留めて、『思考力・判断力・表現力等の育成』には踏み込まない!」と宣言したくなる。しかし、それも我々のプロ意識が許さない。

2. 論理的表現重視、即興的対話不足

中教審の答申にある、言語は、「コミュニケーション

ンや感性・情緒の基盤」との指摘は、現在の言語活動のあり方を考える上で示唆的である。私たちはコミュニケーションを通して、直接ことばで表現されない情緒、感情をも読み取り合う。感性・情緒の基盤としての言語は、論理や思考の基盤としての言語と一体をなすものであり、一方だけを指導すべきものではない。しかし実際には、外国語科も含め各教科の言語活動は、論理的思考・判断の表現が重視される傾向は強く、感性・情緒に富むコミュニケーションは軽視されていると言わざるをえない。

もうひとつの特徴として、評価方法を意識してか、単元目標となる言語活動に、事前に原稿を作成するスピーチ活動が多い点も挙げられる。事例集の中には、「満員バスのなかで高齢者に席を譲らない友人に会った時、自分（立っている）ならばどう話しかけるか」というペア、グループでの対話的活動事例も挙げられている。友人関係に配慮しつつ状況を判断し、自分の意見を述べるのが求められる、感情、倫理、論理が入り交じるなかなかの難題である。感性や情緒が論理や倫理と相まって葛藤するなかで判断し、他者との対話のかたちで表現される素晴らしい課題であるが、ハードルが高いため、スキットを事前に作成する scripted 型であり、即興型の対話活動ではない。

しかし、私たち英語教師は、他者との対話活動が外国語学習には必要だと体験的に知っている。授業運営でも、ペア、グループでの言語活動が不可欠であることも感じている。論理的思考課題のハードル、評価方法の制限との折り合いをつけ、対話的な言語活動を充実させ、感性や情緒の育成にも光を当てるのが現在の課題と言えよう。

3. 論理と感情を表現する即興型対話活動

これまでの議論を整理しておきたい。1) 言語は論理的思考の基盤としての側面と、感性・情緒、コミュニケーションの基盤としての側面がある。2) 論理的思考を育む言語活動はハードルが高く、思考—文章化—表現の手順を踏む scripted 型の活動が多い。3) 生徒を個別に評価する必要性からか、単独でのスピーチ活動が多い。これらを表にすると以下になる(ディスカッションは半ば scripted 型とも言える)。

	Scripted		Unscripted	
	論理思考	感性情緒	論理思考	感性情緒
単独	フォーマルスピーチ		即興スピーチ	
複数	スキット, ドラマ	ディスカッション	チャット	

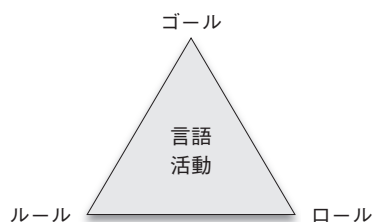
今回の特集の、チャット、スキット、ディスカッションの実践事例は、scripted speech 中心の言語活動を超えて、言語活動について様々な工夫や発想の転換を図っておられる先生がたの報告である。

チャット活動では、限られた発話から相手の意図や感情を察し、それに対する同意・共感を表現する言語の働きが重視される。身近な話題について短い発話をつながげながら、感情や意図を伝え合うことを目標とするチャットは、unscripted 型の言語活動への第一歩である。台本がないからといって、話題だけ与えられていきなり自由に話させるわけではない。即興的な活動にも一定のお膳立てはあるし、対話には緩やかな社会的スクリプトがある。チャットであれば、相手にいきなりプライベートな質問をしないこと、相手の発話を無視した脈絡のない返答をしないことなど、暗黙の(だが指導する)「ルール」がある。

スキット活動は、script のある対話的言語活動で、その一番の特徴は、自分自身ではない「役割(ロール)」を演じる場所にある。演技者として役のセリフを理解し、感情移入して発話する。スキット活動は、「英語の暗記」を超えて、演劇として取り組まれるとき、その意義が一層実感される活動である。

ディスカッション活動は、論理的思考の領域での課題で、最終的に参加者が話し合いの「ゴール」を共有するのが特徴である。他者の意見を傾聴し、自分の意見と対比して、合意を目指す。それだけに発話が長くなりがちで、生徒たちへの負荷が高くなるが、協同してこそなしえる成果を目指す、組織・社会的言語活動(の第一歩)が体験できる。

「ルール」「ロール」「ゴール」は、実はこの言語活動にも多かれ少なかれ含まれる。ゴール到達のために、各々の役割(ロール)を帯びて、ルールを踏まえて活動できるような言語活動をデザインするのが、我々の使命である。



4. Language is a tool for communication, or communication is a tool for learning English.

語彙・文法・音声の知識・技能は、コミュニケーションのための道具と言われる。しかし、外国語の授業を観察していると、コミュニケーション(言語活動)が、英語の知識・技能を習得するための道具になっているケースが少なくない。これでは、言語活動の中身が薄く、充実度が低くなる。「道具としての言語の知識・技能の習得が十分でない外国語教育では、道具(=手段)と目的の関係が逆転するのは当たり前だ!」と言ってしまっただけでは、コミュニケーション力が養われる授業にはずっと辿り着かない。

慎重かつ熱心に言語の知識・技能の定着・習得を目指す授業者の信条に共感する一方で、「言語の知識・技能」と「コミュニケーション」とを分けて、一方を「目的」とし他方をそのための「道具」とする発想を捨てて欲しいと思う。まだ知らないことに対して、臆せず臨める言語活動の場としての授業づくりを行うことで、「まずは知識(道具)」という呪縛を脱し、言語の知識・技能もコミュニケーションも「目的であり道具でもある」という発想への転換を果たせるのではないだろうか。